

話す・書くスキルの向上をめざした 小学校国語科授業実践 —— 課題分析を活用して ——

学籍番号 189969
氏名 香西 恵利
主指導教員 庭山 和貴

1. 実践研究の背景

1.1 国語科において求められる力

知識基盤社会の到来やグローバル化の進展など社会が急速に変化する中、現在の学校教育では「思考力・判断力・表現力等」の育成のために、言語活動の充実を図ることが求められている。国語科においてはとくに「話す」「聞く」「書く」「読む」という言語行為を通じた言語活動を展開していく必要がある（樺山, 2017）。本実践研究を実施した実習校においても、「話す」「書く」の基礎的なスキルの向上に重点を置いた取り組みを行っていた。よって本研究では、児童の「話す」「書く」スキルに着目し、それらの向上を目的とした実践研究を行った。

1.2 授業設計における課題分析

課題分析とは、学習目標を達成するための下位目標やそれらの関係・順序を明らかにする手法のことである（稲垣・鈴木, 2011）。先行研究より、課題分析を活用した学習指導を行うことで、学習内容をスモールステップに分けることができ、学習内容の習得に対する有効性が示されている（岡, 2017; 植松, 2018）。よって、本研究における授業実践では課題分析を取り入れ、学級の児童全員が学習目標を達成できるよう試みた。

2. 実践研究

2.1 実践研究 I（基本学校実習 II）

実践研究 I では、小学校第 2 学年を対象とした単元「たからものを しょうかいしよう」において「話す・聞く」スキルを向上させるための学習指導の工夫と効果の検証・考察を行った。指導内容を検討するため学習指導要領記載の指導事項の課題分析を行った。自分の宝物について発表原稿を書き、学級全体の前で発表（スピーチ）をする活動を行った。スピーチ練習の際、上手な話し方や聞き方について、お手本の提示とフィードバックの工夫を取り入れた。その結果多くの児童が全員の前でスピーチをすることができた。また、話す・聞くスキルに関してルーブリックで評価し、児童の実態を把握することができた。一方、課題として、スピーチに対して抵抗を示す児童が見られたことや、「聞く」は見かけによる態度でしか評価することができなかつたことが挙げられた。

2.2 実践研究Ⅱ（発展課題実習Ⅰ）

実践研究Ⅱでは、「話す」スキルの向上を目的とし、小学校第3学年（実践研究Ⅰと同じ児童ら）を対象とした単元「話したいな、うれしかったこと」の授業実践を行った。課題分析を行い、それをもとに単元計画や使用教材の準備に当たった。嬉しかった出来事について発表原稿を書き、学級全体の前で発表（スピーチ）をする活動を行った。スピーチ練習において実践研究Ⅰよりも練習回数を増やし人数や形式を徐々に本番の発表へと近づけていく工夫をした。その結果、多くの児童が実践研究Ⅰと比べてルーブリック評価に基づく話すスキルの得点が上昇した。実践研究Ⅰと同様にすべての児童が授業者によるお手本をもとにスピーチ原稿を作成できた。また、発表の際には児童はほとんど抵抗なくスピーチをすることができ、さらには話し方を工夫する児童も見られた。

2.3 実践研究Ⅲ（発展課題実習Ⅱ）

実践研究Ⅲでは、「書く」スキルの向上を目的とし、小学校第3学年（実践研究Ⅰ・Ⅱと同じ児童ら）を対象とした単元「心にのこったことを」にて課題分析を活用した授業実践を行い、効果の検証と考察を行った。心に残った出来事について、出来事の様子やその時の気持ちがわかるような文章を書く活動を行った。実践研究Ⅲでは実践研究Ⅰ・Ⅱと比べ授業者による補助や支援を減らしたり、「順序よく文章を組み立てる」という新たな課題を取り入れたりした。より下位目標を細分化し、児童が各下位目標を1つずつ達成できるよう指導した。その結果、実践研究Ⅱと比較した際、授業者による補助を減らしたにも関わらず、ルーブリック評価に基づく書くスキルの得点に差はほとんど見られなかった。これは、課題分析を活用することで学習目標に対して必要な支援や補助が明らかになり、実践研究Ⅰ～Ⅲを通じて一貫した指導を行ったことで、児童の書くスキルの向上につながったことを示唆する。その一方で、実際に順序よく文章を書く際に必要に応じて接続詞等を加えることや、文末表現を工夫することに苦戦する児童も数名見られた。困難である原因を明らかにするところまで至らなかった点、他の学習課題に対しても順序よく文章を書くことができるかの検証まで至らなかった点については、今後の課題である。

3. 総合考察

3つの実践研究の結果より、課題分析を活用することで学習目標を達成するために必要な具体的なスキルが明らかになることや、学習内容を児童の実態に合うスモールステップに分けること、児童が学習目標を達成できること、その結果児童のスキル向上に寄与することが示された。しかし、他の学習課題に対しても児童が筋道立てて話すことができるか、順序よく文章を書くことができるか、という般化について検証をすることはできなかった。

また、実践研究Ⅲにおいては、授業者による補助を減らしても、多くの児童は課題を達成することができた。課題分析を活用することで、児童の達成状況を細かく把握でき、さらには授業者による補助・支援の量を計画的に調節できることがわかった。これを系統的に行っていけば、児童は最終的に自力で課題を達成できるようになることが期待できる。今後、児童が様々なスキルを獲得できるよう、課題分析を他の教科の授業実践にも応用するなど、より効果的な学習指導になるよう工夫していくことが求められる。